

親鸞の龍樹理解

—正定聚—

本 多 静 芳

はじめに　　〳親鸞の「正定聚不退転」と

龍樹の『十住毘婆沙論』　　〵

親鸞の浄土教理解は、「唯以信心」、すなわち、「唯、信心を以て」と言われるように信心が仏道成就の正因といわれている。この本願他力の信心による証である現生の利益が、正定聚・不退転とも示される。

正定聚・不退転は、大乘仏教において菩薩の階位の一つとして理解され、諸説あるが、『瓔珞本業經』、『華嚴經』などの五十二位説によるものが多く用いられている。この五十二位説によれば、十信、十住、十行、十回向、十地、等覺、妙覺となり、その十地の第一位を歡喜地とも、不退転地とも、阿惟越致とも、阿毘跋致などともいい、必定不退の菩薩の実踐徳目が願と行にわたって縷々注釈されている。

初歡喜地とも呼ばれるこの正定聚の位が、特に龍樹の『十住毘婆沙論』〔易行品第九〕に阿弥陀仏の仏名への聞名・称

名に支えられた信として詳しく示されている。このため、『十住毘婆沙論』（以下『十住論』）は、特に後代、浄土教によつて重要視され、また親鸞の浄土教理解においても看過できないものである。しかし、『十住論』は、浄土教の中だけでなく、同時に大乘の菩薩の仏道体系の中で重視されたものである。大乘仏教における菩薩の特徴は、發菩提心に支えられた誓願の成就として展開し、『十住論』の第二、三、四品で菩薩の初地そのものが、第五品で菩薩の願が、第六品で菩提心の実・不実のありようが、そして、第二十七品まで初地を求める菩薩の行と果が示される。

特に『十住論』で大乘菩薩道を歩むものが避けなければならない重要なことは、菩薩の死とされる「墮二乘」の危険性であると〔易行品第九〕に示される。親鸞も、この「易行品」を重視しているが、「菩薩の死」とは墮二乘と示される自我的関心に墮ちこみ、他のいのちとの関わりを失うこととされる。これは、自我の狭い生き方に閉じこもり、他者との関係

や社会の問題を見いださなくなるような「心の問題」として
仏教を偏つて理解するあり方といえよう。『十住論』には、次
のように示される。

問曰。是阿惟越致菩薩初地如先說。至阿惟越致者。行諸難行久
之可得。或墮声聞辟支仏地。若爾者是大衰患。如助道法中說。

若墮声聞地 及辟支仏地 是名菩薩死 則失一切利 以下偈略。

この自問自答のやりとりは続く長行で、たとえ地獄に墮ち
ても再び仏道を歩む可能性があるので畏れることはないが、
大乘菩薩にとつて二乗に墮すことは、すなわち、自利にのみ
ふけり、二利双行を永遠に知ることがないので、「菩薩の死」
とも、また「敗壞の菩薩」ともよばれると解説される。

もつとも、『十住論』『入初地品第二』には、自ら無上菩提
心を起こすことができず、ただ仏力によつてのみ必定地（初
地）に入れられ、「是の仏の十力を知る為の故に、大心もて願
を發し、即ち必定聚に入る」^② しかない生死の苦海にあえぐ鈍
根懈怠、随愛、顛倒の衆生のためにこの論が説かれているこ
とを示す。そして、「阿惟越致相品第八」には、それを敗壞
の菩薩と示し、その敗壞の菩薩の姿こそがまさに仏力を得る
資用となることが述べられ、正に阿弥陀仏の力用を説く『十
住論』の趣旨が展開している。

つまり、『十住論』の論旨は、鈍根懈怠の衆生、すなわち
凡夫が、やがて敗壞する菩薩となつても、そこに働く仏力が

成立することによつて十地の菩薩たらしめられていくのであ
る。

このように、墮二乗に向かう随愛、顛倒のあり方が、具体
的には他者との關係を断じていくという二利の喪失となる。
しかし、そのような自我関心、自我執着の方向へ、逆戻りし
ないあり方を阿惟越致とも、正定聚不退転とも呼ばれるので
ある。

聞名による信心を明確化し、大乘菩薩の同朋精神を具体的
に生きた親鸞の正定聚の理解には、このような背景があるも
のとして論考を進める。

一、正定聚の語の経緯

正定聚の言葉は、古く原始經典に散見される。そこでは、
正定聚が、邪定聚や不定聚とともに三聚として用いられ、仏
教經典成立の早い時期から採用されていたことが指摘されて
いる。^③

この三聚について、正定聚は、「正しくさとりを得るに定
まつた類聚」の意味であり、邪定聚は、「さとりに反し、そ
こに至ることのできない類聚」の意味であり、不定聚は、「正
定聚とも邪定聚とも未だ定まらない類聚」の意味である。こ
の概念は、原始仏教に始まり、アビダルマ仏教、大乘仏教の
流れを通し、また、インド・中国・日本や、その周辺の仏教

文化圏においても共通するものである。

次に大乘經典において、華嚴經には『六十華嚴』には正定聚の語は見られないが、『八十華嚴』巻六に、

各令如須弥山微塵數衆生住邪定者入正定聚

各令如須弥山微塵數衆生隨其所樂生於天上³⁾

と、須弥山の微塵の数ほどの邪定聚の者を正定聚に入れることを述べている。

ところが、初期大乘仏典において「正定聚」「三聚」の語の教示の頻度は高くなく、頻出するようになるのは、大乘の論釈においてである。

龍樹の系譜から見ると、『大品般若経』（鳩摩羅什）の巻十七には、

復次須菩提。菩薩摩訶薩行六波羅蜜時。見衆生住於三聚。一者必

正聚。二者必邪聚。三者不定聚。

と示され、続く文には菩薩がさとりのために六波羅蜜を行じて仏国土を浄める時、邪聚の衆生のいないように誓っている。ここには、諸の衆生が等正覚に向けて生きることこそが、意味ある人生となり、大乘の菩薩はそのことに精進すべきことを説いている。基本的に、大乘における自利利他の実践が、特定の人の上に閉ざされることなく、他のいのちとの開かれたあり方を示すものであり、邪定聚の衆生を課題にする生き方ということで、正定聚という言葉の方向性が理解される。

二、浄土經典における正定聚

親鸞の浄土真宗の依拠となる魏訳『無量寿経』では、第十一願文と下巻の第十一願成就文に、

設我得仏。国中人天。不住定聚必至滅度者。不取正覚⁶⁾。

仏告阿難。其有衆生。生彼国者。皆悉住於正定之聚。所以者何。彼仏国中。無諸邪定及不定聚⁷⁾。

と阿弥陀仏の国土に生まれた者は、全て皆必ずさとりを開くに決定した正定聚の位に住して、邪定聚・不定聚の者がいないことが説かれる。仏国土に正定聚のみあつて、他の二聚がないということは、『大品般若経』にも見られるが、『無量寿経』では仏国土の特質として強調されている。また、より古い訳の『大阿弥陀経』『平等覚経』では、これに相当する文言は見られず、仏国土に生じた者が正定聚に住するとはされていなかった。魏訳より新しい『如来会』『莊嚴経』では、細かな差異はあるが、示唆するところは魏訳と同様とされる。⁸⁾（なお、不退転の語は、『無量寿経』第四七願、及び同十八願成就文その他に見られ、仏国土に至れば不退転に住することが説示されている。）

すなわち、『無量寿経』においては現生における正定聚ということが課題として明確化されていないということである。

三、龍樹の論書における正定聚

龍樹の仏道理解において重要な『大智度論』で正定聚の語は、

以仏神通力拔出衆生令往正定聚中。不墮三惡趣。是名淨仏土。（卷九三）

と出てくるだけである。すなわち、三惡趣に墮することがないと述べられている。

龍樹の論書としては、先に挙げた『十住論』が正定聚に関して大きな影響を与えるものである。この書は、『華嚴経』『十地品』の別行経である『十住経』羅什（或いは『十地経』）の釈論である。（世親の『十地経論』も同じ『十地経』の釈論であるが、十地の説明に関して『十住論』が十地の徳を強調しているのに比べると『十地経論』は修行の説明に重きが置かれている。）『十住論』では、初地を不退転地とし、入初地こそが菩薩の重要なあり方であることが強調されている。すなわち、現生における正定聚がここでは課題となっている。

四、親鸞にいたる正定聚

正定聚は、浄土教経典においては、浄土に往生したものの利益として、正定聚の位に入つて必ず滅度に至ること、そして不退転に往することが記されており、このことは、法然の

『選択集』にそのまま受容されている。一方で、『選択集』第一章には聖道・浄土の二門判を述べているが、私釈に曇鸞の『浄土論註』冒頭の文を引用して、「龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』易行品において、難易二道のそれぞれに阿毘跋致があること」「仏力が住持すれば即ち大乘正定之聚に入る。正定は即ち是れ阿毘跋致なり」という内容が示されている。これによつて専修念仏により仏力に住持されることと大乘正定之聚に入ること、それが不退転でもあることを述べているのである。それが現生におけるものであることが示される。このように、法然においては正定聚を、『無量寿経』の系譜を通して浄土に往生しての正定聚と『十住論』を通して専修念仏による現生での正定聚という現当二世に亘る課題として展開したのである。

この法然の正定聚の課題を現生で得られるものと明確に解釈したのが親鸞であった。親鸞の浄土教理解からいえば、他力回向の信心を獲得して、浄土往生が定まるとき、同時に現生正定聚も定まるものとされた。これは、法然を通して親鸞に継承され、やがて現生における正定聚として發揮されたものといえる。

現生正定聚の語は、『教行信証』「信巻末」の「現生十種益」に、正定聚が総益として示される。

言一念者。信心無二心故曰一念。是名一心。一心則清淨報土真因

也。獲得金剛真心者。横超五趣八難道。必獲現生十種益。何者爲十。中略。十者入正定聚益也。¹³⁾

この現生と正定聚が組み合わされて合成された語を親鸞は、その晩年、『御消息』の中に用いて頻繁に言及している。

その用例を概観してみると『御消息集』第一に、

真實信心の行人は、摂取不捨のゆゑに正定聚の位に住す。このゆゑに臨終まつことなし、來迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり。來迎の儀則をまたす。¹⁴⁾

とある。また、同第十一には、

信心をえたるひとは、かならず正定聚の位に住するがゆゑに等正覚の位と申すなり。『大無量壽經』には、摂取不捨の利益に定まるものを正定聚となづけ、『無量壽如來會』には、等正覚と説きたまへり。その名こそかはりたれども、正定聚・等正覚は、ひとつところ、ひとつ位なり。等正覚と申す位は、補処の弥勒とおなじ位なり。¹⁵⁾

と示され、聞名による信心成就の人は、現生において必ず正定聚の位に住することが示されている。これは、『一念多念文意』に、

かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆゑに¹⁶⁾

と端的に示めされ、親鸞において晩年とくに現生における正定聚という問題が意識化・明確化されたといえる。

先に示したように、浄土教經典の系譜では、正定聚は浄土に往生した当益として見なされており、『無量壽經』の第十

一願の「定聚に住し、必ず滅度に至る」とされている。これを親鸞は、八十五歳の撰述である『浄土三經往生文類』に、

大經往生といふは、如來選択の本願、不可思議の願海、これを他力と申すなり。これすなわち念仏往生の願因によりて、必死滅度の願果をうるなり。現生に正定聚の位に住して、かならず真實報土に至る。これは阿彌陀如來の往相回向の真因なるがゆゑに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大經』の宗教とす。このゆゑに大經往生と申す。また難思議往生と申すなり。¹⁷⁾

と明確に、正定聚を現生のことと規定している。さらに、十六歳撰述の『尊号眞像銘文』の『大經』十八願文の釈には、如來より御ちかひをたまはりぬるには、尋常の時節をとりて臨終の称念をまつべからず、ただ如來の至心信樂をふかくたのむべしとなり。この眞實信心をえんとき、摂取不捨の心光に入りぬれば、正定聚の位に定まるとみえたり。¹⁸⁾

と示される。

結語

從來、臨終というところに集約して問題とされていた浄土往生の姿が、現生で正定聚に住することで往生即成仏、すなわちただちに滅度に至るという形で浄土教の救済を現世、すなわち時代・社会との関係において捉え直していく態度が親鸞において、より明確なものとなったといえよう。このこと

によつて、各々個別的体験である自身の臨終に心を執らわれることなく、尋常、平生のいのちを他のいのちと共なる関係、すなわち無限のいのちの連帯の中に生きる念仏者が成立したのである。つまり、親鸞は、浄土教を教条化した死せる観念の体系の中に閉じ込めるのではなく、どこまでも具体的な現実問題との関わりにおいてのみ、明らかにし、そして信心の花は開くことを示し続けたのである。

- 1 『大正親脩大藏経』（以下『大正蔵』）二六・四一・c、四一・a
- 2 『大正蔵』二六・二四・b、c
- 3 五十嵐明宝『正定聚不退転の研究』大東出版社七頁に、「正定聚」に関する記述のうち、最も古いと思われる文章の一つは、漢訳では『長阿含経』八、衆縁経第五の文と、それに関する単独経典『大集法門経』とに出てくるものである」とある。
- 4 『大正蔵』十・二九・b
- 5 『大正蔵』八・三四八・a
- 6 『浄土真宗聖典—注釈文—』（以下、『注釈版』）浄土真宗本願寺派発行一七頁、『大正蔵』十二・二六八・a
- 7 『注釈版』四一頁、『大正蔵』十二・二七二・b
- 8 五十嵐明宝『正定聚不退転の研究』大東出版社六五頁参照
- 9 『大正蔵』二五・七二・c
- 10 『大正蔵』二六・二三・a
- 11 『大正蔵』二六・一二七・a
- 12 『注釈版』二五一頁、『大正蔵』八三・六〇七・b
- 13 『注釈版』七三五頁、『大正蔵』八三・七一・a

新刊紹介

松本史郎 著

道 元 思 想 論

A 5 判・六八四頁・定価一五、〇〇〇円
大蔵出版・二〇〇〇年二月

- 14 『注釈版』七五八頁
- 15 『注釈版』六八〇頁
- 16 『注釈版』六二五頁
- 17 『注釈版』六四四頁

（キーワード）正定聚、親鸞、龍樹、不退転

（武蔵女子大学助教授）